

---

# おむつ天使

柳 大知

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おむつ天使

### 【Nコード】

N5928F

### 【作者名】

柳 大知

### 【あらすじ】

スツカラカンになり家に帰ると部屋におむつ天使がいた…

今朝、確かに俺の財布の中にいた偉人達は、どうもその居心地が気に入らなかったようで、太陽と同じように夜にはすっかり姿を消していた。

ああああああ〜終わった……

俺は心の中でそう叫ぶと、帰宅ラッシュで混み始めた駅前通りをとぼとぼと歩きだした。

二月前、ひよんなことでバイトを辞めてからパチンコ店に入り浸りの毎日。

最後の給料分しか無かった銀行の残高が、あっという間に給料半年分ほどに膨れ上がった。それでゆつくりと次のバイトを探せばいいと余裕をかましていたのだが……。

二週間前に登場した新台との相性が最高に悪く、周りみんなドル箱積んでるのに俺の台だけ大ハマリなんて日が続いたもんで……、明日こそはと思っっているうちに見る見る残高は減っていき、ついに今日で底をついたのだった。

じゃあサヨウナラ……

というのは冗談で死ぬ気はさらさらない。俺は実家暮らしで、家賃も食費も一切かからない。見事な寄生っぷりだが、どうにも仕方がない、高校卒業後に就職した会社が一年持たずに倒産。再就職しようとしたが中々上手くいかず、もうフリーター暦二年になる。ん、今はニートってやつか……

駅からだらだと歩いて10分程で実家に着く。築二十年だったか、その割にはまだ綺麗な外観を保つ二階建ての家だ。何でも俺は三人兄弟の一番目として生まれたらしいのだが、両親の設計図通り

に事は運ばなかったようで、俺には弟も妹もない。なので二階には物置部屋が二つある。おまけに親父は五年前から単身赴任で海外に行ってるもんで家には二人きり。一階が母の生活スペース、二階は俺の聖域、そんな感じになっていた。

俺は玄関を開け、雑に靴を脱ぐと、ただいまも言わずに二階に上がった。それが普段と変わらぬ俺の帰宅姿。部屋で着替えたらリビングに降りる。そこで飯を食いながら多少会話をする。働け働けと急かされる訳でも無く、世間話をする。だがそれ以外で母と会話することはあまり無かった。

ミシッ、という十段目の板を踏むと必ず聴こえる音を耳にし、俺は二階に上がった。

二階には扉が三つ。一番手前が俺の部屋、何故かこの部屋が一番暖かいのだ。

いつものようにドアノブに手をかけ扉を開ける。すぐにそいつは俺の視界に映りこんだ。ベッドの上の異物。そう思ったのは俺が子供好きではないからだろう。何でか知らんが、そこには裸で白いオムツ姿のガキがいた。

さっきも言ったが、俺に兄弟はいない。思わずドアノブを引く。数秒待って押し開ける…

消えてはくれなかった。何かの間違いで俺の目に映りこんだ訳ではなさそうだ。奴はしっかり俺を見ていた。

ベッドの上のそいつは、オムツのCMに出てくるような可愛らしい赤ちゃんではなく、丸々太っていて宛らちびっ子相撲幼稚園部門の横綱。オムツのまわしをしめ、貫禄十分の顔で、腕を組みどっしり構えてやがる。

「おい…何だよ？」

俺はその異様な雰囲気ややや圧され気味になりながら訊いた。

「おいとは何だ僕は天使だぞ」

横綱は訳の分からない言葉を発したが、声だけは子供らしかった。

「は？天使？」

俺はそういつてからベッドの側に腰を下ろした。

「うん、天使、君にお告げに来た」

自分を天使だというそいつは腕を組んだまま細い目で俺を見下ろしていた。

どっからどう見ても生意気なガキにしか見えなかったが、害は無さそうなので話だけ聞いてやることにした。

「お告げって？」

俺がそう言うと、天使は一度深く頷いてから口を開いた。あまりにもどつしりと構えているので何だか大仏のようにも見えてきた：「いいか一度しか言わないから、ちゃんと聴けよ。これが神からのお告げだ。明後日この家に来客がある。そいつは工場の経営者だ。お前はそいつの工場で働くのだ。そこで一年かけて100万を貯めるのだ。そして……」

そこで一瞬話が止まったが、天使は細い目をさらに細くしてから頷き、話を続けた。

「そして、一年後、来年の11月30日に駅前の宝くじ売り場で100万円分の宝くじを買いなさい。そうすれば運命が変わり三億円が当たる。以上」

はは、ありがたいお言葉——などとは言わず、正体のわからんガキに向かって俺は訊いた。

「ホントかよ…信じられないな、天使だっていう証拠を見せてくれよ」そいつは俺の言葉に動じることなく、また深々と頷きこういった。「よし証拠を見せてやる、ついて来い」

そういうとそいつは立ち上がり、開いていた入り口から部屋の外にでた。

そうして俺は貫禄たっぷりの背中を見ながら階段を下りた。

本当に天使なのだろうか？たしか天使って羽が生えてなかったわけ……

天使は階段を下りるとリビングに入ってしまった。そこには母がいる。

俺がリビングに入ると、母はいつものように俺をチラッと見てからこういった。

「食べる？」

それはつまり温かい飯を用意してくれると言う事なのだが……

「そんなことより母さん、変な子供が見えるだろ？」

普段なら、あゝとか、うんとか答えるのだが、今はこの答えしかない。目の前に見知らぬガキがいるのだ。

「え？何言ってるの？」

母はそういつて首を傾げた。

「何って、ここにいるじゃないか、子供が……」

俺はそういつて目の前のガキを指差す。

「そりゃ、あんたは私の息子ですけどね……、ここってどこよ？ちよつと、まさかあんた変なクスリとかやってるんじゃないでしょうね……」

母はマジな顔でそういつた。

俺は首を横に振って答えるしかなかった。

「クスリなんてやるわけないだろ……」

「ほんと？大丈夫なんでしょうね？変なこと言わないでよ……、まあいいわご飯の用意するから」

そういつて母はすぐ側のキッチンへ向かった。

気付くと天使が満足げな顔でこっちを見ていた。

「どう、僕は君にしか見えないんだ。分かったろ」

どうやら本当らしいが……

「おっと、時間が無い、僕も忙しいんでね、もう一つだけ言い事を教えてやる。母親に訊いてみな、『宝くじ当たったんだろ？』って

ね、そうすれば小遣いが貰えるよ。それも神の贈り物さ、いいかい  
必ず神のお告げを実行するんだよ。そうすることで氣の流れが変わ  
って君は三億円を手にするんだから！」

そういうと、天使はあっという間に俺の横を通り抜け、裸足で玄  
関から出て行った。

俺はしばらく呆然としていたが、母が夕食の用意を終えテーブル  
に皿が並んだので、とりあえず席に着いた。そして首を傾げながら  
も飯を口に運び。側でテレビを見ている母に話しかけた。

「なあ、本当にさっきの見えなかったのか？」

「ちよっとまだ言ってるの？大丈夫？クスリなんてやってたら追い  
出すわよ！」

語尾は強めだった。事実を言ってるのに説教か…

「ならいいや、クスリはやってないよ…、ねえ母さん、宝くじ当た  
ったんだろ？」

ついでだから訊いてみた。

「あら、何で知ってるのよ…、あんたもしかして戸棚に隠してた  
じ見つけたの？」

とこんな方向に話は進み、しばらくして二階に上がった俺の手に  
は一万円札が五枚握られていた。

何だか知らないがラッキー！これで明日あの台にリベンジを…

そんな軽い気持ちで俺は眠りにつき、翌日に向かえた。が、また  
しても家に帰ってきた俺の財布は空っぽになっていた。

今日こそは、と朝から並んだというのに…。俺は疲れ果てベッ  
ドに倒れこむとそのまま眠ってしまった。

目を覚ましたのは朝の10時頃、階下から母親の声がした。

「ヨシヒロくちよっと来なさい」

ん？何か、呼んでる…

寝癖でボサボサの頭を掻きながら、俺は階段を降りていった。

するとリビングに作業着姿の男がいた。ん？まさか：

そのまさかで、その男は父の遠い親戚。最近ヒット商品が出たおかげで工場が大忙しだと言った。それで、あの天使の言った通りになった。俺はそこで働かないかと誘われた。

寝起きで頭がボーっとしながらも、俺は考えた。ここまで本当になったのだから、ひよつとして：

おまけに面接も無ければ、条件もそれなりに良い。金も底をついたのだし……

そうして俺は、その工場で働き出した。電車で30分かかるが交通費は全額出た。おまけに週休二日で月二十万貰えた。バイトでそれだけ稼ぐのは中々大変だ。

次第に仕事にもなれると100万を貯めることが目標になった。

億万長者を夢見ている内に月日はあっという間に過ぎ、気付けばその日が目前に迫っていた。

100万はなんとか用意できた。これで明日、駅前の宝くじ売り場でくじを買えば……

その為だけに、明日は休みを貰ったのだ。明日の為に今日は早く寝よう。俺はそう思い眠りにつこうとした。

だが、そのとき、部屋の扉が開いた。そこには母がいた。

母が夜に二階に上がってくることなど、初めてではなからうか。

「どうしたんだよ……」

俺は半身を起こし訊いた。

母はニコッと笑ってこういった。

「明日、宝くじ買うの？」

「何で知ってるんだよ……」

あれ以来天使の話をした覚えはない。

「ふふ、天使なんていないのよ、その調子でちゃんと貯蓄しなさい」



いね」

母はそれだけいって扉を閉めた。

明日の予定は見事に吹っ飛んだ：

やはりあのガキはただの横綱だったのだ：

でもまあ、悪くないか、それなりの生活を手にしたし：

(了)

**(後書き)**

後半失速気味です…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5928f/>

---

おむつ天使

2010年10月8日15時49分発行